

初期G・ウィンスタンリの宗教思想

——イギリス革命期における急進主義への一考察——

栗 原 淑 江

一 はじめに

一七世紀のイギリス革命期に数多くみられた民衆的急進思想のなかで、ディガー(Digger)運動の指導者ウィンスタンリ(Gerrard Winstanley, 1609-1676)の思想が注目されるようになったのは、一九世紀末以来のことである。死後二世紀以上にわたって「忘れられた思想家」にとどまったウィンスタンリのトラクトがブリティッシュ・ミュージアムのトマソン・コレクションのなかから発見されたのは、一八九五年のことであつた。発見者ベルンシュタインは、ウィンスタンリの思想がもつ社会的・歴史的意義を評価し、かれを近代社会主義の先駆者とみた。⁽¹⁾ウィンスタンリを近代社会主義史のなかに位置づけようとするこうした試みは、のちグーチ、ペティゴースキー、スィージャーらに継承されている。⁽²⁾他方、そうした研究と並行して、ウィンスタンリの宗教思想に注目し、その神秘主義的要素を強調するピアレンズ、ジョーンズ、シエンク、セイバインなどの研究もあらわれた。⁽³⁾さらに、二つに分離したウィンスタンリ像を統合しようとする試みがザゴリンによっておこなわれた。⁽⁴⁾その間にはウィンスタンリの著作集が編まれ、⁽⁵⁾新たなトラクトも発見されるなど、⁽⁶⁾ウィンスタンリ研究はますます盛んになってきており、とくに一九六〇年以降の研究の進展はめざましい。

本稿では、そうした従来の研究成果をふまえながら、ウィンスタンリがディガー運動を開始する以前、すなわち一六四

九年四月以前のトラクトに即してかれの宗教思想を検討するが、その際、とくに近年注目されている千年王国論との関連で考察したい。千年王国論 (Millenarianism) は、聖書の黙示録 (およびダニエル書) に由来し、メシアが地上に再来して王国を千年にわたって統治するという信仰である。歴史的・地域的制約をこえて広義に解釈され、ある種の宗教運動をあらわす理念型として用いられるばあいもあるが、キリスト教史の上では、二、三世紀の古代教父に起源をもつ。その後は長い間キリスト教における異端的教義とされてきたが、民衆の間で生き続け、一七世紀のイギリスにおいて「再生」した。

イギリス革命期における千年王国論は、従来、第五王国派 (Fifth Monarchy Men) を中心とする狂信的セクトに限定して検討され、非合理的な神秘主義として否定的に取り上げられていた。それが、一九六〇年前後の研究に端を発し、ナートル、ソールト、ラモント、キャップ、ウィルソンらによって、千年王国論は周辺の位置から革命期思想の中心的なテーマにひきあげられた。⁽⁸⁾ とくに、ラモント・キャップ論争を通じて、「一七世紀イギリスの時代精神としての千年王国論」という問題が提起され、今日まで引き続き活発な研究が展開されている。⁽⁹⁾ こうした動向のなかで、ウィンスタンの思想にみられる千年王国論に関しても若干の研究がなされている。⁽¹⁰⁾ 千年王国論については、多様な解釈が可能で、かならずしも一義的な定義ができないこともあり、具体的に論ずるばあいには困難な問題も残る。しかし、近年の千年王国論を中心とした再検討の試みは、イギリス革命研究に新たな局面を開いたといえよう。

本稿では、初期ウィンスタンのトラクトに即して、かれの宗教思想を神観念、歴史観、担い手論の諸観点から考察し、その特性を当時の社会・思想状況のなかで明らかにするとともに、そこにみられる千年王国論的傾向を指摘したい。

二 宗教思想の形成

個々のトラクトの検討に入る前に、一六四九年のディガー運動開始前のウィンスタンの宗教思想の形成過程と、その

背景となった当時の政治的・宗教的状况を検討しよう。

イギリス革命に先行する時代は、封建国家の最終形態としての絶対王政期であった。中世封建社会の危機への対応として生まれたこの中央集権体制は、一七世紀に入るころにはあらゆる面で矛盾を露呈してきていた。農村においては、封建的土地所有関係が根底から揺らいで農民層の分解が進み、都市においても、ギルドなどの封建的諸制度が攻撃されるなど、封建体制を突き破って登場してくる新しい社会層にとっては、絶対王政は障壁と思われるようになっていた。

それとともに、宗教的対立も深まっていた。この当時、宗教は今日よりもずっと広い外延をもつものであった。当時の人々にとっては、「宗教は現実であり、宗教的信念は彼らの生の主要な原動力であった」⁽¹⁾。絶対王政においては、国王が世俗の最高の統治者であると同時に、イギリス国教会の首長でもあった。政治的権力と宗教的権威は不可分の関係にあり、教会組織は行政機構でもあった。当時、ピューリタンによる説教運動の着実な浸透によって国教会の基礎は大きく揺らいでいた。一六三三年には、国教会の危機を打開する使命を担ってウィリアム・ロードがカンタベリ大司教となり、いわゆるロード体制が幕を開けた。かれは、国教会と司教制度は神の定めによるものであるとの立場から、チャールズ一世の命をうけて「徹底政策」を断行し、これに反抗するものたちに厳しい弾圧を加えていた。

王政への反抗が強まるなか、革命の舞台となる長期議会が一六四〇年十一月に開催された。議会では冒頭から国王への不満が爆発し、国王の抵抗にもかかわらず議会の圧倒的多数の結束でロードは逮捕され、ロード体制も崩壊する。一六四二年には第一次内乱が勃発し、議会軍が勝利をおさめる。その後、議会と軍隊の対立が表面化し、一六四八年には、第二次内乱が開始される。ウィンスタンの最初の神学的パンフレット『神の不思議』(*The Mystery of God Concerning the Whole Creation, Mankind, Spring, 1648*)が出版されたのは、このように沸き立っていた一六四八年春のことであった。

ウィンスタンは、一六〇九年ランカシャーのヴィガンに生まれ、洗礼を受けている。父エドワードは織物商で、この

地区における有力者であつたらしい。かれが生まれる数年前に、両親がピューリタン・ノンコンフォーミストの秘密集会への参加をめぐって地方教会当局ともめたことが知られている。⁽¹²⁾ ウィンスタンリの二〇歳以前の経歴についてはさだかではなく、どのような教育を受けたかも不明であるが、父の社会的な地位から考えても、グラマー・スクールに通つたことが想定される。しかし、それ以上の正式な神学的教育を受けたとは考えられない。当時の大学教育を受けたものの特徴であるラテン語の引用が彼の著作にはみられないからである。⁽¹³⁾ 一六三〇年頃にはすでにロンドンに居住しており、織物商のもとで徒弟生活を送り、のち独立して織物業に従事するが、内乱による不況が原因で一六三七年には破産する。一六四〇年にはロンドンの外科医の娘スーザンと結婚し、一六四三年頃、妻の家族がいたサリー州コバムに移つたことが知られている。サリー州は、のちにかれがディガー運動の第一歩を始めたところである。

この間のウィンスタンリの宗教的立場については、明らかではない。当時、ロード体制の没落ののち、事実上の検閲の廃止により、パンフレットや説教に、さまざまな急進的理論がみられるようになっていた。さらに、独立派のスポークスマンたちや長老派教会の支持者たちは、古い敵である監督教会主義者よりも急進的な異端者と逸脱者に悩まされるようになっていた。セパラティスト (Separatist)、シーカーズ (Seekers)、バプティスト (Baptist) などの動きが目立ち始めたのである。革命前夜の緊迫した雰囲気の中、千年王国論的思想も広まりはじめていた。こうしたなか、ウィンスタンリは、事業の失敗による落胆などから、さまざまな宗教運動に目をむけていったと考えられる。そして、多分かれは、シーカーズを経由して神秘主義的聖霊主義者になっていったと思われる。

トラクトにあらわれるウィンスタンリの宗教思想の端緒は、啓示の体験である。すなわち、「……私の心は楽しい考えで満たされた。かつて本で読んだことも、誰の口から聞いたこともない多くのことが私に啓示された」⁽¹⁴⁾と。その神秘的体験を軸にかれの宗教思想を展開したのが、一六四八年の春から秋にかけて出版された著作、すなわち『神の不思議』、『神の日の曙』 (*The Breaking of the Day of God, May 20, 1648*)、『聖人の樂園』 (*The Saint's Paradise, Autumn, 1648*)

『真理の台頭』(Truth Lifting Up its Head Above Scandals, October, 1648)であり、翌一六四九年一月にはさらに『正義の新しき法』(The New Law of Righteousness, January, 1649)が出版された。⁽¹⁵⁾

ウィンスタンリはその生涯において、現在わかっているだけで二一冊の著作を公けにしているが、ディガー運動以前のこの五冊は、それ以降のものと区別されて、とくに神学的なものといえる。運動期と運動敗退後のものは、一冊をのぞいて⁽¹⁶⁾、おもに社会的・経済的諸問題を扱ったものであり、初期の神学的傾向はかげをひそめている。そこで、本稿では、これら初期のトラクトを中心に、ウィンスタンリの宗教思想の特性を明らかにしたい。個別的にみると、それぞれに強調点の若干の相違や理論の展開のあとがみられる。とくに『正義の新しき法』においては、神学的な面とともに、ディガー運動への転換点ともみられるような具体的な社会理論的側面が強調されている。しかし、一方ではこのトラクトはかれの千年王国論的思想の集大成ともいえるのであり、⁽¹⁷⁾ここでまとめて検討する必要があると思われる。

三 ウィンスタンリの宗教論の諸相

①神観念

ウィンスタンリの神は、当然のことながらキリスト教の神であり、世界と人間を創造した神である。しかし、そのアプローチの仕方や把握の仕方には独自のものがある。すでにみたように、ウィンスタンリの宗教思想は、その神秘的な原体験たる啓示からはじまる。『神の不思議』によると、その体験で得たものは、自己の内部にはたらく神の力の存在であった。それ以前のかれは「蛇の束縛のもとにあった」⁽¹⁸⁾が、神の啓示により蛇と闘い、苦しみ、最後に内なる神によってその束縛から解放されたという。

「私は心から神をあがめてはいたが、神がどういうものであり、またどこにかれがあるのかを、少しも知ることができず、……ただ憶測していたにすぎなかった。悪魔をあがめて、それを神だと信じこんでいた。」ところが、いまでは、神

は彼岸にある最高存在ではなく、すべての人のなかにあるスピリットであることを知るにいたった。「太陽や月や星とともに、神が天上の栄光の座にあると考える必要はなくなった。神は未知の場所にあるのではなくて、心のなかにあり、そこからあなたを統御するのである。……外部の彼方に神を探す人は、……神が何であるかを知ることができず、自己の幻想によって欺かれてしまう。……内なる神を求め、内に現われる正義のスピリットにしたがうものだけが、自ら拝するものが何であるかを知るのである。」⁽¹⁹⁾このように、神を人間の内部にはたらくスピリットと捉え、天国あるいは死後の他の場所にあるものではないとする点が、ウィンスタンリの神観念の特徴である。

こうした「内なる神」としての神観念は、既存の宗教的権威の徹底的な否定を可能にした。というのも、この神のスピリットは直接的体験によってのみ知ることができるのであり、それを感じることにない「説教や祈りや、そのほかすべての外面的な形式は、不毛の行為である」⁽²⁰⁾とされるからである。ここには、体験重視の考えがうかがわれる。神秘主義はもと「神との直接的体験」⁽²¹⁾を核心とするが、ウィンスタンリにおいても啓示が最重要と考えられていた。カトリックの神秘主義者にも類似した霊的体験がみられる場合があるが、それらが教会の権威に基礎づけられているのに対して、ウィンスタンリの場合にはまったく個人主義的なものである。啓示の声はすべて神のことばと考えられた。この神はスピリットを知るのは「経験」によるのであって、「想像」や「思想」によるのではない。「もしも、あなたの知識が単に読んだものとか他の人から聞いたものから生じたのであれば、それは肉の知識であって、スピリットの知識ではない」⁽²²⁾とされる。

ところで、こうした場合、ウィンスタンリは聖書をどのように考えているのだろうか。マイクロプリントでみるかれのパンフレットの欄外には、引用し参照した聖書の章節があげられている。普通一頁に数箇所あるいはそれ以上あり、かれの神学的著作の多くの部分が聖書によっていることが知られる。のちには、聖書の引用は巻末にまとめてあげられるようになる。ウィンスタンリ自身の言葉によれば、「原体験は私的な幻想のスピリットではなくて、聖書の言葉に一致してい

る⁽²³⁾。このように、啓示体験を聖書で正当化し、意義づけながらも、かれはその直接的体験を聖書からくる知識の上においているようである。「聖書の全体は、スピリチュアルな神秘を示すものにすぎない⁽²⁴⁾」とされるし、「モーゼの時代や、預言者の時代や、使徒の時代や、キリストとよばれる人の子の時代におこったことを知るのに忙しく、彼の心の内にあらわれる正義の光と力を知ること待たない」のはよくないとされ、「内なる心によって語るものは、真に自らが語ることを知り、崇拜するものを知るのである⁽²⁵⁾」とされる。これは、「内なる光」を主張する場合の当然の帰結ともいえよう。クウエーカーの創始者、フォックス (George Fox) においても、宗教的権威は聖書ではなく神との直接的体験におかれている。こうしたウィンスタンリの聖書使用は、象徴的で比喩的、暗喩的であり、正統派神学からすれば不適当な面があるのも否めない。しかし、かれの著作には聖書以外の書の引用はみられないことからいっても、聖書がかれがこの世を理解するうえでの唯一の基本的な源泉であったことは確かであろう。

さて、ウィンスタンリの神観念は、『聖人の樂園』においてさらに展開し明確化される。すなわち、そこでは、神と理性の同一化という概念が導入されるのである。肉に対するスピリットの勝利を達成するためには、「神あるいは父あるいは主とよばれるスピリットが理性であると知ること」が必要とされる。ここでいう理性とは、非宗教的な近代合理主義的志向を意味するのではない。かれにおいては、理性はいわば「宇宙における秩序の原理⁽²⁶⁾」として把握されている。「すべてのものを創造し、あらゆる被造物を統治するもの、それが理性である。」あるいは、「神とは無限のスピリット＝理性であり、……至上の存在なるゆえに主と呼ばれ、全被造物がかれから由来するゆえに父と呼ばれる」などとされる。さらに、この神は人間のみならずあらゆる被造物に内在するとされる。すなわち、「神は天上に住んでいるといわれるが、それは万物の生命と平和であるスピリットであり、理性なのである」。

こうした神観念は、当時にあつてはめずらしいものではない。当時のイギリスにおいては、キリスト教は聖霊主義的・個人主義的傾向をもつようになり、たとえばすでに述べたシーカーズの発生となってあらわれていた。シーカーズは、い

かなる共同の組織も排し、啓示に基づいて神を自らの心のなかに求めようとした。また、ファミリースト (Familist) がウィンスタンリに深く影響したことも指摘されている。ファミリーストは、「内なる神のスピリットだけが正しく聖書を理解することができる」とし、「祈禱を拒否し、肉体の再生を否定した」。また、天国や地獄もこの世をはなれて存在するものではなく、「天国は人が笑っているときであり、地獄は悩しみ、嘆き、苦しんでいるときである」とまでいったという。⁽²⁷⁾ また、フォックスの根本思想たる「内なる光」の理念は、ウィンスタンリの神観念との直接的な影響関係については不明であるが、酷似している。⁽²⁸⁾ 今回は言及しないが、ウィンスタンリが晩年にクウェーカーに改宗したとされる点と考えあわせると、興味深い問題を提示している。

このように、ウィンスタンリの神観念は、当時の聖霊主義の流れのなかに位置づけられるような内なる神⁽²⁹⁾スピリット⁽²⁹⁾理性の同一視というものであった。この神⁽²⁹⁾理性こそが、新しい時代——神の時代——を開く鍵であるとされる。かれは言う。「スピリットは、毒をぬられたこの地上の浄化剤とならなければならない。なぜなら、それは、あらゆるものを試し、金と残りのものを分離させる永遠の火だからである。」⁽²⁹⁾では、こうした神観念に基づく神学的歴史観は、どのように展開されていくのであろうか。

② 歴史観

ウィンスタンリは、人類の歴史を、「神と蛇の闘争」の場としてとらえる。かれによれば、神に創造された人類の墮落は、利己心が人間を支配したことにはじまるのであり、利己心は蛇のかたちで人間の心に内在し、あらゆる悪と不幸の源泉となる。そして、神が人間の心の内なる蛇を打ちまかし、蛇を追い払い、神が人間の心のなかに住むようになることが、「神の不思議」である。こうした「神と蛇との闘争」は、まず人間の心のなかを場とするのであるが、それが客観的に社会に投影されると歴史観が形成される。⁽³⁰⁾

心のなかの闘争の外在化としての歴史を、ウィンスタンリは七つの時代に区分する。すなわち、第一の時代はアダムの時

代であり、神がアダムを創造してすぐに、かれに法を授けたときである。第二の時代はアダムからアブラハムまで、第三の時代はアブラハムからモーゼまで、第四はモーゼの時代から神が肉に現れたキリストの誕生までであり、そこでは神の被造物への愛と蛇への呪いが明らかになる。第五の時代は、神がキリストに現れる時期から聖人にも現れる時期までである。⁽³¹⁾

そして、ウィンスタンリの時代は、最後の段階への過渡期たる第六の時期であるとされる。この時期には「蛇の猛威が増す。というのは、蛇の時代が短くなりつつあるからである。そして聖人に対する蛇の暴力、怒り、非難、抑圧、挑発および殺害が倍加され、時代は非常に悪くなる」⁽³²⁾。この時代には獣が生きており、神は富や外的な自由、世俗の権力などのすべての利益を獣に与える。そして、人間の権威は獣の手中に握られている。しかも聖人の手中には、真理のほかには戦う武器は何一つない。しばらくの間は、腐敗した権力を維持しようとして蛇が世間を攪乱している。しかし、救いは近づいている。神は万人のために内外両面の平和と自由を作り出しつつある。神の王国は、天上ではなくて、地上に、このイギリスに実現するのである。「いまは獣の時代であり、そのもとでイングランド、スコットランド、アイルランドがいまやうめき苦しんでいる。……しかし、それは短期間にすぎないであろう」⁽³³⁾とされる。

そして、「この審判の日が神の第七の時代であり、この日にすべての神の不思議は完了する」⁽³⁴⁾。そのとき、神は各人を裁き、その所業に応じて報いる。あるものは蘇り、他のものは死滅する。邪悪な蛇は死をもって報いられ、神に従わない人は、永遠の火中に投げこまれる。「その偉大な最後の日は、蛇が全被造物の足下に屈し、永久に破壊されるという偉大な働きの結末である」⁽³⁵⁾。その偉大な仕事をなすために、神は、「国王、議会、軍隊、州、王国、大学、人間の学問、研究などを揺り動かしているし、揺り動かすであろう」⁽³⁶⁾。その仕事を邪魔するすべてのものは振り落とされる。神は、王国の統治者たちの心のなかに入り、その権力を獣から取り戻す。そして、「教会統治をわれわれの主キリストのみの仕事とさせる。それはキリストの正当な権利であり、かれは聖人の王だからである」⁽³⁷⁾。そうすれば、すぐに市民統治は改革され、混乱とバビロンは消滅するであろう。その日こそ、真の平和が打ちたてられる日であるとされるとされるのである。

神と蛇との闘争というこうした歴史観は、のちの『正義の新しい法』において、さらに展開する。すなわち、社会闘争の面に重心が移り、私有財産制と階級社会の成立などが論じられるようになるのである。墮落したアダムは、一部の人間が他の人間を支配する座に座った肉の知恵と力であるとされる。これが私利の発端となり、土地の売買とその私有とがはじまる。政府の法律によって私有財産制が擁護されるにいたり、土地の独占者は同胞がひとしく母なる大地によって育まれるのを妨げている。このように考えるウィンスタンリにとっては、私有財産こそ、人間がそのもとでうめき苦しんでいる呪であり重荷である。その結果、「あらゆる人に土地の恵みを共同の宝庫として利用させる愛と正義の共同体」が目指されることになる。ここには、私的所有と相続、地代の支払い、土地とその生産物の売買と雇用労働の制度はすべて個人におけるスピリチュアルな再生と自己充足の過程において終焉させられなければならないとの情熱的な信念がみられる。そして、具体的には、掘ること (Digging) あるいは共同耕作の啓示について述べられる。のちのディガー運動の実践へと連なる思想が形成されるのである。

ところで、こうした時代設定は、当時のいわゆる千年王国論を標榜するセクトである第五王国派の歴史観とは異なっている。第五王国派においては、歴史は七段階ではなく、文字通り五段階に区分される。すなわち、バビロン、ペルシア、ギリシアの三王国の崩壊に続いてローマ法王の統治する第四王国が終末に近づきつつあり、その混乱のなかから地上におけるイエスの統治する第五王国が出現するであろうとされている。革命期における第五王国派の代表的スポークスマンであるジョン・アーチャー (John Archer) は、ヨハネのビジョンを、教会の勃興からコンスタンティヌスの教会の墮落、さらに宗教改革における福音的再興、そして千年王国の切迫という歴史的な発展によって説明する。そして、そののちキリストの隆臨、最後の審判、正しい人々の樂園がつづくとする。

ウィンスタンリと第五王国派は、このように時代設定が異なっているだけでなく、実現の過程の考え方も大きく相違している。すなわち、あらゆる現世の支配と権威は打ち倒されなければならないとする第五王国派は、その実現のために武

器をもって闘う。敵対勢力との現実の闘争を通して、神の王国を実現しようとするのである。それに対して、ウィンスタンリにとっては、神の王国の実現はあくまで神の仕事なのである。人間がなすべきことは、ただ待つことである。かれはいう。「忍耐強く主を待て。神を愛するすべての人に、知恵と温和と愛のスピリットによって、ユーフラテス河を干しあげよう努力させよ。この正義と愛の太陽が統治者と人々との相互に昇るとき、この激動する国家の嵐も静まるであろう。」⁽³⁹⁾そして、この太陽がもっと高く昇るとき、その明るい輝きがイングランドの自由をもたらすであろう。

暴力を否定して神のわざをひたすら待つという姿勢は、『正義の新しい法』まで一貫してみられる。そこでも、「だれびとも暴力や強奪で、隣人の所有物を奪ってはならない。主キリストが多くの人々の心のうちに広がり、かれらの心一つにし、正義にしたがって互いに一体となって行動しうるようになるまで待たなければならない」と⁽⁴⁰⁾とされている。正義の法の実現は武力によらず、スピリットⅡ理性という「神的な力の普遍的な拡大」による。ウィンスタンリは、かれの時が近づいていると、切迫感をもって語ったが、その時とはいつなのかを示すことはなかった。こうした態度には、「じっと静止していなさい、そうすればあなたがたは神が抑圧者を処理するのを見るであろう」とするクウェーカーとの共通項を見出すことができる。⁽⁴¹⁾

③担い手

さて、こうしたウィンスタンリの宗教思想において、その担い手はどのような人々と考えられているであろうか。ここでいう担い手とは、内なる神を直接に体験で知り、神の王国実現にむけて実践する人々ということになる。ウィンスタンリによれば、まずはじめに啓示をうけることになる人々は、必ずしも賢者、学識者、富裕者ではなくて、世間で軽蔑された人々、学問のない人々、貧しい人々である。⁽⁴²⁾富裕者、学識者は、邪まな富やあやまった学問のために人間改造が著しく困難なので、かれらの救済はもっともおくれて到来するとされるのである。ウィンスタンリは「あなたがた、地上のちりとして踏みじられてきた人々、……学識者や富裕者にいつも労働の成果を奪われている貧しい人々よ。自らの権利に目

覚めよ」と呼びかける。⁽⁴³⁾

この立場からすれば、聖職者も批判されることになる。ヒルによれば、ウィンスタンリの反聖職者主義は、革命期の他のどの著者よりも激しく、確信に満ち、体系的である。⁽⁴⁴⁾すでにみたように、「内なる神」との直接的体験を最重視するウィンスタンリにあっては、教会や知識は信仰上非本質的なものと考えられたばかりでなく、人々を惑わすものであった。聖職者は、蛇の力に惑わされてあやまった礼拝の形式をつくり、キリストから直接に真実の啓示をうけている聖人を迫害して正しい信仰の普及の障害となっていると考えられる。しかも、法律によって漁夫、牧人、農民、商人などが神の教えを説くことは禁じられており、説教は学識ある特権階級の独占するところとなっている。ウィンスタンリは、「宗教的権力というものは、神の命じたものではなくて、真理を殺し、聖人を迫害するために、狡猾な人間が国王から得たものである⁽⁴⁵⁾」と指摘する。

『正義の新しい法』にいたると、聖職者批判はより激しさを増してくる。かれは、来世における救済を説く聖職者にむかって、「彼岸の天国というのは幻想である」として、つぎのように攻撃する。「肉体がちりに埋もれるまで、この神の栄光は知られず見られないと告げることによって、もはや人々を欺いてはならない。私は宣言しよう。この偉大なる不思議は現れはじめている。そして、それは肉の眼で見られるにちがいない⁽⁴⁶⁾」と。

このように、変革主体を貧しい抑圧された人々とする考え方は、当時の民衆思想に共通のものであった。フォックスも、「神は貧しい人々に味方し、彼らを助けるであらう⁽⁴⁷⁾」とし、「国民を欺く貧欲で高慢な聖職者たちよ……諸君の破滅は到来しつつある。……この世の強大にして富裕な人々よ、泣き叫べ。最後の日のために財宝を蓄積した諸君の悲惨が到来しつつあるから。……主の裁きの日は現れつつある⁽⁴⁸⁾」としている。第五王国派にも同様の批判がみられ、「底知れぬ煙から立ち上がったこの国の二大悪疫が聖職者と法律家であり、彼らはともに腐敗した、肉の、反キリスト的利益を維持している⁽⁴⁹⁾」と叫ばれている。また、セイバインは、この点でウィンスタンリに影響を与えたものとしてアナバプティストをあ

げている。⁽⁵⁰⁾

ともあれ、革命の最高潮に達した時期に、ウィンスタンリは次々と神学的著作をあらわし、以上のような宗教思想を展開していったのである。神の啓示をうけた聖人として、ウィンスタンリは、「内なる神」の確信を軸に歴史観を形成し、既存の教会制度、宗教的権威、その精神的支柱となっている学問などを激しく非難していったのである。

四 むすび

以上みてきたように、初期ウィンスタンリの宗教思想においては、神はスピリットⅡ理性と同一視され、人間の心のかのみならず自然界のすべての被造物に内在すると考えられる。また、歴史は蛇と神との闘争として捉えられ、最後の日には神が蛇を打ちまかし、勝利すると考えられた。さらに、そうした宗教意識の担い手は聖職者や学識者、富裕者ではなく、虐げられた貧しい一般民衆であるとされた。こうしたかれの宗教思想は、書斎で練り上げられたものではなかった。かれは体系的理論家ではなく、革命期の沸き立つような状況のなかで啓示をうけ、「旧世界は、火のなかで、羊皮紙のように燃え上がっている」⁽⁵¹⁾と認識して、民衆にむかってトラクトを出版したのであった。それゆえ、そのトラクトも理論的に整備されているというよりは、繰り返しの多いアジェンションとしての面を強くもっている。それらのいくつかは、版を重ねて読まれたことが知られている。

イギリス革命期においては、救済は形式的儀式をともなった教会を媒介とはせず、神との直接的体験によって達成されるものであることや、すべての人間存在のうちにキリストを見出そうとする聖霊主義的信仰が、主に下層の農民、都市の職人、小市民層に広まっていた。これは、上層市民階級がピューリタニズムの信仰をもったのと対比されるが、ウィンスタンリの宗教思想もこうした文脈のなかで考えられるべきであろう。ウィンスタンリが、時代の「特殊な社会的・精神的状況の所産」⁽⁵²⁾であるならば、当時の思想状況を反映した宗教思想を形成したのも不思議なことではない。

注目すべきことは、すでに指摘のあるように、そうしたウィンスタンリらの聖霊主義的信仰が、ピューリタニズム文化に対する「対抗文化としての可能性」⁽⁵³⁾を示したことである。ウィンスタンリが「内なる神」という神観念に徹底したことによって既存の宗教的権威を否定したことはすでにみたが、その結果、ピューリタニズムを突き抜けて、新たな道を提示しえたと考えられる。神を「内なる理性Ⅱスピリット」として聖霊主義的に自由に個人主義的に解釈するため、理念的にはもともとラディカルに既存の「世の中をひっくり返す」方向性をもっていたといえよう。ピューリタニズムにおいては、聖書は文字通りに解釈され、預定説の絶対的神が君臨する。近代社会は、マックス・ウェーバーの説をまつまでもなく、そうした宗教思想を基盤として推進されてきたのであるが、その所産としての近代社会が現在さまざまな諸問題に遭遇している。ヒルも指摘するように、ウィンスタンリの宗教思想とその展開である社会観は、こうした問題解決へのひとつのヒントを与えうると考えられよう。とりわけ、かれの自然観は広い射程を持つものである。こうした見方は、いわば現代からの視点であり、ウィンスタンリ自身の意図や主観そのものとはいえないかもしれないが、従来かれの宗教思想が、神秘主義的側面が強調されるあまり、「後ろ向き」と評されることが多かったことを考えあわせると、こうした再評価の試みも意義があるといえよう。

つぎに、千年王国論との関係でいえば、次のようになろう。冒頭でふれたように、最近の研究において、イギリス革命で千年王国論が果たした役割が大きかったことが明らかにされつつある。革命勃発前後の社会的不安と経済的危機にともない、民衆は革命の開始とともに千年王国切迫の期待を大きくした。政治・経済思想も宗教的文脈で表現されるような時代にあっては、既存の権威である国教会を背景とした王権と戦うために、さまざまな立場のものが千年王国論を用いた。第五王国派はいうまでもなく、従来千年王国論とは無縁と考えられてきた独立派も、積極的に千年王国論的思想を主張していたことが明らかにされてきている。

しかし、千年王国論の展開のしかたは立場によってさまざまであり、どれが典型的な千年王国論であるということも難

しい。千年王国論の一義的な定義は困難であるが、一応のメルクマールとして、個人的な神をたて、終末思想あるいは黙示録にもとづく歴史観をもち、その実現は神の直接的介入によるというようなことを考えれば、初期ウィンスタンリの宗教思想は「千年王国論」的なものとして性格づけてよいであろう。すなわち、内なる理性たる神が、神の支配する王国を実現すべく再臨するとされている。しかも、その過程についての確固たるプログラムはなく、ひたすら神による直接的な介入を待つべきであるとされている。しかも、そこには、神の国が近づいたとの切迫感がある。ただ、厳密に言えば、「聖人がキリストとともに支配する千年間の王国」という言及はなく、ウィンスタンリのそれは、千年王国論そのものというよりは、二元論を強調する黙示録的終末論であるともいえる。⁽⁵⁴⁾しかし、終末論一般と千年王国論との概念的区別も明確ではない状況にあつては、ウィンスタンリの宗教思想は、厳密な意味での千年王国論とはいえないまでも、千年王国論的なものであるということはできよう。

同時に、他方では、ウィンスタンリの場合、かなり独自のものを含んでいたことも確かであり、その一つの現れが、のちのデイガー運動である。かれは第五王国派のように直接的に武器をとって神の王国を実現しようとしたのではなく、クウェーカーのように「内なる光」を感じるものたちの宗教集団を形成したものでなかった。そうではなくて、ウィンスタンリの実際の運動は貧民による農民運動として現れた。彼の千年王国論の特性は、それが世俗的・社会主義的世界観に展開して、貧民の農民運動と結びついたところにある。その運動の担い手は、啓示を受けた人々というよりは、むしろ、「困い込みによって土地を追われた貧農、もしくは都市の下層の人々」であった。

しかし、注目されるのは、この運動さえも、神の啓示に従ったものであることである。運動開始の二、三カ月前にうけた啓示については、『真のレヴェラーズの旗は進む』(*The True Levellers Standard Advanced*, April, 1649)に詳しい。すなわち、「地上を共同の宝庫にするために働くということが、トランス状態において私に示された」が、その声とは「共に働き、共にパンを食べよ、これを全世界に宣言せよ」とのものであった。この声は三度聞こえた。そして「そのスピリ

ットに従って、われわれはこれを述べ、第二に他の人が読めるように書いて宣言し、三番目に、今や、行動によって宣言する。すなわち、共有地を耕し、種を蒔き、ともにパンを食べることによって宣言するのである」⁽⁵⁵⁾と。この宣言通り、一六四九年四月、ウィンスタンリは数十人の仲間と、サリー州聖ジョージの丘の共有地でディガー運動の実践に入るのである。⁽⁵⁶⁾

初期ウィンスタンリの千年王国論的宗教思想は、当代のピューリタニズムに対する対抗文化としての可能性をはらみつゝ、個人の内なる自覚を突破して、ディガー運動に具現化した。このことによって、ウィンスタンリの思想と行動は、イギリス革命期に一つの位置を占めることになった。かれの宗教思想はのちの運動と不可分に結びついており、その正しい理解のためには、思想と運動をトータルに捉えることが要請されよう。ディガー運動の過程で、初期の宗教思想はどう変化したのであろうか。また、運動敗退後の宗教思想はいかなるものであったろうか。それらの検討については、今後の課題としたい。

註

- (1) Kautsky, K./E. Bernstein (hrsg.): *Die Geschichte des Sozialismus in Einzeldarstellungen*, Bd. I, Zweiter Teil, V. Abschnitt, Die kommunistische und demokratisch-sozialistische Bewegungen in England während des 17. Jahrhunderts, 1895. なお、ベルンシュタイン以来のウィンスタンリ研究の詳細については、田村秀夫『増補——イギリス・ユートピアの原型』中央大学出版部、一九七八年、一三八—一七一頁等を参照。
- (2) Gooch, G. P.: *The History of English Democratic Ideas in the Seventeenth Century*, 1898. Petegorsky, D. M.: *Left-Wing Democracy in the English Civil War: A Study of the Social Philosophy of Gerrard Winstanley*, London, 1940. Sweezy, P. M.: *Socialism*, 1949.
- (3) Berens, L. H.: *The Digger Movement in the Days of the Commonwealth as revealed in the Writings of Gerrard Winstanley, the Digger*, London, 1906. Jones, R. M.: *Studies in Mystical Religion*, London, 1909. Do.: *Mysticism and Democracy in the English Commonwealth*, Cambridge, 1932. Sabine, G. H. (ed.): *The Works of Gerrard Winstanley*

with an Appendix of Documents relating to the Digger Movement, Ithaca, 1941. (以下、Works 及び略記) Shenk, W.; *The Concern for Social Justice in the Puritan Revolution*, London, 1948.

- (4) Zagorin, P.; *A History of Political Thought in the English Revolution*, London, 1954.
- (5) Sabine, G. H. (ed.); *op. cit.*, 1941. Hamilton, L. D. (ed.); *Selected Works of Gerrard Winstanley*, London, 1944.
- (6) 新たに発見されたトリストを紹介したものの、Aylmer, G. E.; *England's Unfolded, or an Incouragement to take the Engagement: A Newly Discovered Pamphlet by Gerrard Winstanley*, in: *Past and Present* 40, 1968. など。
- (7) 広義の千年王国的運動としてとらえられるものとしては、たとえば、キリスト教的伝統のもとでは民衆十字軍、モアビズム、ドイツ農民戦争、さらに近代における「エホバの証人」、「セヴンスデー・アドヴェンティスト」など。また、非西欧文化圏では、メラネシアのカーゴ・カルト、北米インディアンのゴースト・ダンス、中国の太平天国の乱、アフリカの多くの宗教運動などがあげられる。
- (8) Nuttall, G. F.; *Visible Saints: The Congregational Way, 1640-1660*, Oxford, 1957. Solt, L. F.; *Saints in Arms: Puritanism and Democracy in Cromwell's Army*, 1959. Lamont, W. M.; *Godly Rule: Politics and Religion*, 1969. Do.; Richard Baxter, the Apocalypse and the Mad Major, in: *Past and Present* 55, 1972. Capp, B. S.; *Godly Rule and English Millenarianism*, in: *Past and Present* 52, 1971. Do.; The Millennium and Eschatology in England, in: *Past and Present* 57, 1972. Wilson, J. F.; *Pulpit in Parliament: Puritanism during the English Civil Wars, 1640-1648*, 1969. Do.; A Glimpse of Syons Glory, in: *Church History* 31, 1962.
- (9) キャップ＝トキントン論争について、安藤哲「ピューリタン革命と千年王国説」(『西洋史学』第一〇五号、一九七七年)・山本典「魂の書物——ピューリタン革命と千年王国主義」(『没上』第八号、一九七七年)などを参照。
- (10) Juretic, G. M.; *The Mind of Gerrard Winstanley: From Millenarian to Socialist*, Dissertation (Northern Illinois Univ.), 1972. Sanderson, J.; The Digger's Apprenticeship: Winstanley's Early Writings, in: *Political Studies* 22-4, 1974. Juretic, G. M.; Digger no Millenarian: The Revolutionizing of Gerrard Winstanley, in: *Journal of the History of Ideas* 36-2, 1975. Bardegues-Roman, J. L.; *The Social Ethics of Gerrard Winstanley: The English Digger (1609-1676): A Study of the Concept of True Magistracy as Reflected in His Pamphlets*, Dissertation (Union Theological Seminar in the City of New York), 1975. Harvey, J. M. Jr.; *Religious Unorthodoxy and Radical Politics: The Political Theory of Gerrard Winstanley*, Dissertation (Ohio State Univ.), 1982.
- (11) Morton, A. L.; *The World of the Ranters*, London, 1970, p. 9.
- (12) Aylmer, G. E.; The Religion of Gerrard Winstanley, in: J. F. McGregor/B. Reay (eds.); *Radical Religion in the*

English Revolution, 1984, p. 93.

- (13) Harvey, J. M. Jr.; *op. cit.*, p. 67.
 - (14) Winstanley, G.; *A Watch-word to the City of London and the Armie*, August, 1649, in: *Works*, p. 315.
 - (15) なお、このうち前三冊については、セイビンによる著作集には抜粋しか掲載されていないため、ブリタニッシュ・ミュージアム所蔵のマイクロプリントを使用した。これは、中央大学教授田村秀夫先生にお借りしたものである。記して深く感謝したい。なお、ウィンスタンリーは、デイカー運動の期間中につきの五冊を一巻にまとめて出版している。Several pieces gathered into one Volume: set forth in five books, London, 1649.
 - (16) 一六五〇年に書かれた『藪の中の火』(*Fire in the Bush*, 1650.) がそれで、そこには、初期の神学的著作にみられたような叙述があり、運動後のウィンスタンリーの宗教思想を示すものとして注目される。
 - (17) ジェームズ・マックは、『正義の新しい法』における強調点は第一に千年王国論的なものであり、かれの千年王国論的志向をもっともよく説明するものであるが、従来その点が見過されすぎてきたと指摘している。Juretic, G. M.; *Digger no Millenarian: The Revolutionizing of Gerrard Winstanley*, in: *Journal of the History of Ideas* 36-2, 1975, p. 270.
 - (18) Winstanley, G.; *The Mysterie of God*, 1648, pp. 11-13.
 - (19) Winstanley, G.; *The Saints Paradise*, 1648, pp. 89-90.
 - (20) Winstanley, G.; *The Breaking of the Day of God*, 1648, p. 52.
 - (21) Jones, R. M.; *Mysticism and Democracy in the English Commonwealth*, Cambridge, 1932, p. 11.
 - (22) Winstanley, G.; *Truth Lifting up its Head above Scandals*, 1648, in: *Works*, p. 108.
 - (23) Winstanley, G.; *The Mysterie of God*, 1648, To my beloved country men of the Countie of Lancaster.
 - (24) Winstanley, G.; *Truth Lifting up its Head above Scandals*, 1649, in: *Works*, p. 116.
 - (25) Winstanley, G.; *The New Law of Righteousness*, 1649, in: *Works*, p. 224.
 - (26) Winstanley, G.; *The Saints Paradise*, 1648, p. 78.
 - (27) Hill, C.; *The World Turned Upside Down: Radical Ideas during the English Revolution*, London, 1972, pp. 22-23.
- この書を紹介したものに、大西晴樹「ピューリタン革命期急進的宗教運動における経済倫理の三類型」(『明治学院大学キリスト教研究紀要』第一八号、一九八五年)がある。
- (28) 両者の神観念の類似点と相違点については、田村秀夫『イギリス革命思想史』創文社、一九六一年、二五九―二六三頁を参照。
- (29) Winstanley, G.; *The Saints Paradise*, 1648, p. 93.

- (30) ウィンスタンの内的状況が社会観に反映していくプロセスを、ヘンクの精神分析の手法を使って分析した興味深い学位論文『*McCullum, A. B.; Gerrard Winstanley and the Diggers: A Study of Psyche and Myth in 17th Century Secarianism*, Dissertation (Syracuse University), 1972.
- (31) Winstanley, G.; *The Mysterie of God*, 1648, pp. 33-35.
- (32) Winstanley, G.; *ibid.*, pp. 44-45.
- (33) Winstanley, G.; *The Breaking of the Day of God*, 1648, p. 101.
- (34) Winstanley, G.; *The Mysterie of God*, 1648, p. 50.
- (35) Winstanley, G.; *ibid.*, p. 64.
- (36) Winstanley, G.; *The Breaking of the Day of God*, 1648, p. 115.
- (37) Winstanley, G.; *ibid.*, 1648, p. 125.
- (38) Winstanley, G.; *The New Law of Righteousness*, 1649, in: *Works*, p. 205.
- (39) Winstanley, G.; *The Breaking of the Day of God*, 1648, p. 126.
- (40) Winstanley, G.; *The New Law of Righteousness*, 1648, in: *Works*, p. 38.
- (41) Penington, I.; *A Considerable Question about Government briefly Discovered*, 1653, p. 7.
- (42) Winstanley, G.; *The Mysterie of God*, 1648, To my beloved country men of the Countie of Lancaster.
- (43) Winstanley, G.; *The New Law of Righteousness*, 1649, in: *Works*, p. 53.
- (44) Hill, C.; *op. cit.*, p. 140.
- (45) Winstanley, G.; *The Breaking of the Day of God*, 1648, p. 89.
- (46) Winstanley, G.; *The New Law of Righteousness*, 1649, in: *Works*, p. 170.
- (47) Fox, G.; *The Law of God*, 1658, p. 17.
- (48) Fox, G.; *To all that would know the Way to the Kingdom*, 1654, p. 9.
- (49) Rogers, J.; *Sagitt*, 1653, p. 19.
- (50) Sabine, G. H.; *op. cit.*, p. 234.
- (51) Winstanley, G.; *The True Levellers Standard Advanced*, 1649, in: *Works*, p. 252.
- (52) Jones, R. M.; *Studies in Mystical Religion*, London, 1909, p. 494.
- (53) Hill, C.; *op. cit.*, p. 341-4.
- (54) ユン・ヘンク『*回教の経典*』L. H.; *op. cit.*, p. 94.

(55) Winstanley, G.: *The True Levellers Standard Advanced*, 1649, in: *Works*, p. 261.

(56) このような運動は、当時各地であつていたことが、報告されている。ヒルは、他のディガーコロニーが、「ノーサンプトンシャーのウェリングボロ、ケントのコックス・ホール、バッキンガムシャーのイヴァー、ハートフォードシャーのバルネット、ミッドセッツのアンフィールド、ベッドフォードシャーのダンステブル、ライチエスターシャーのボスワースと、グローチェスターシャーおよびノッティンガムシャーの不明の場所に現れた」と指摘している。Hill, C.: *op. cit.*, p. 124. また、エイルマーは「少なくとも五つの異なった州に七つの中心があつた」としている。Aymer, G. E.: *op. cit.*, p. 102.